

令和8年度今治市大三島美術館40周年記念企画展「作家と大三島美術館」

令和8年10月3日～11月29日

1 竹内浩一 「飛べないトビ」 1971年 紙本彩色

作家自身が「自身の性格からくるのだろう。どこか不安を抱き生きてきた」と述べているが、1970年代頃、若いころの作品は、不安や孤独を象徴的に描いている。白く淡く内側から発光しているような、現在の画風とは異なって見える。

2 中島千波 「衆生口（言わざる）」「衆生耳（聞かざる）」 1978年 紙本彩色

3 作家のことは：人間の喜怒哀楽をテーマに描き初めて3年目、第5回山種美術館賞展に向けての習作のつもりで、「みざる、いわざる、きかざる」を引用し、蓮華に乗って正座している様を描いた2対の作品である。技法的には焼いた銀箔である黒箔を初めて試みた。

第5回山種美術館賞展で「衆生・視」は優秀賞を受賞。2018年に日曜美術館で紹介されたこの作品へ続く2点は貴重なコレクションのひとつ。2点揃っての展示は久しぶり。背景に鈍い金属光沢が所々に見られ、作品に重さ（雰囲気ではなく物理の重さ）があり、感情の重さを感じさせる。

4 林潤一 「菊」 1978年 紙本彩色

計画的に画面を構成し、凝ったことは施さず、清楚な花をそのまま描き出している。

5 石踊紘一 「菊花」 1981年 紙本彩色

東京藝術大学在籍時から人物を中心に描く。女性と四季の花を組み合わせで描いた12点の中の1点。

6 平松礼二 「みち・木祖路」 1981年 紙本彩色

自然を鏡として作家の心象風景を描いた「路シリーズ」のなかでも初期の作品。

7 村田茂樹 「南寧村の広場」 1986年 紙本彩色

1980年に初めて中国へ取材旅行で訪れ、以降何度も中国へ取材に行き、1987年に現代日本画家による中国を描く展に出品。

この頃の村田茂樹氏の風景画に「本来なら最も人が行き交う場所を選んでいるにもかかわらず・・・凝結した静けさ」という評があった。この点は変わらなかったようで「沖縄より辺野古の青い空」でも飛行機が飛んでいても民家が立ち並ぶ住宅街であってもとても静かで人の気配がない。

村田氏は日本画本来の姿勢として線をととても大事に考えており、線が埋没しないよう立体感や奥行の表現を控える傾向があるそうで、それもひとつの理由と考えられる。

9 林功 「想歩」 1986年 絹本彩色

中国や日本の絵画の古典の表現材料や基底材料を研究し、そのうえで絹本を選んで制作していた。日本画は幅広い表現技術を持っていたはず、現代の日本画はそれを せばめて いるのではないか、と考えていた。

11 畠中光享「ひとり」 1973年 綿布彩色

初期作品の自画像。自分と関係ないものが描けなくて、自分の身近なもの、かかわっているものしか描けず、自画像ばかり描いていたころの作品。色も現在と対照的に暗い色が使われている。常に近作、新作を出す作家であり、初期の作品が見られることは珍しい。

15 松本勝 「菖蒲」 1985年 素描

大三島美術館所蔵「菖蒲」も展示中。こちらは1987年に描かれた本画。

16 松本勝氏は自他ともに認める正統派の花鳥画を描く画家。数十回にも及ぶ薄い色の
～ 塗り重ねにより、やわらか味のある深い複雑な色調の中にモチーフが浮かび上がる
18 という描き方。変わらず追求しつづけていることが、1985年の作品と見比べると
よく分かる。

20 平松礼二 「路一湖愁」 1997年 紙本彩色

6「みち・木祖路」と同じ「路シリーズ」でも、こちらは90年代後半頃から見られる
琳派調の要素が出ている。

22 「淙声」は漢詩では、滝から激しく水が流れ落ちる音を表現する。

21「潤声」の「潤」は水が豊富にある様子を現しており、同じ水でも それぞれ異なる流れの
様子を表現している。

1998年に受けた取材で作家は、「僕は写生に長い時間をかけます。花や実だと季節が過ぎて
しまうから、また次を待って結局何年もかかる。写生というのは、つまり自分の手を動かし
ながら自分の時間をそこで大いに費やすことですね。そうやって自分が感じとったものを
画面に入れていく。そういう意味で対象に相對することなんです。・・・」と述べている。

23 京都府南丹市にある芦生の森には数種類の山椒魚が生息している。描くために何度もスケッチを
重ねる村田茂樹氏の細やかな観察が伺える作品。大三島美術館では村田氏のスケッチ、下絵、
トレースなど、作品が出来までの仕事が伺える資料を数多く寄贈いただき所蔵している。
資料整理の途中で山椒魚のスケッチは確認できていないが、背景の石のトレースは展示中。
村田氏は「石」だけを描いた作品を何点も制作していた時期があり、石だけの個展が開催された
こともあった。

25 T.Sエリオットの詩「灰の水曜日」から構想を得た作品。「自分の中の怪奇趣味や若い頃の多感で不安定な気分を描いてみたかった」。

青山亘幹氏が20代のときの作品。この頃の作品は、アイルランド生まれのイギリス人作家、フランシス・ベーコンから影響を受けている。その後、ルネッサンス風の裸婦像を経て、伝統的な日本画の美人画をベースにしつつ現代的な”青山亘幹の美人画”が完成していく。

28 畠中光享 「牛の歩みのように」 2026年 紙本彩色

この展覧会が初出品。どこにも出たことのない新作。